鷹口傳書　三

ヲ多11
552
3

鷹言葉
赤首返ねうの事
斧のうの事
足緒のうの事
[illegible]
毛の名
[illegible]

西園寺家 鷹口傳

一 箸鷹ハ 鷹ノ惣名也

一 とやかへらんと云事
是ハ臆たる羽ハ鷹なんとに梓成ひき
のらくかよく成て梓ノ下にとれ
てみるへく、まゝもを友鏡ともいふ也

一 きうしろあさ此寸法四寸二分大鷹にかきる也

一 鷹にもてまいらす事
[illegible]

かゝる時は鳥をとらてくるみのまゝ鷹にまかす
ゐかく飼事也

一 わきれといふ事
是はとやより人の鷹に飼事とそおもふ
まへ〳〵ゟ鷹屋へいるゝ成へし

一 またかれしといふ事
とやをして此鷹ハ清ハいろかハりしる事也

一 清ちといふ事
是は先小鷹にかはりて色〳〵鷹の成る時

一 大鷹なんとのつかひといふハ其日のかうはい
わるき成り

一 あをしけといふ綱わなを
是ハ清巾に白く薄雪の人のあかくなりて
りしのけ人成ましゆへをしなり

一 あら人落といふ事
これハ小鷹なんとに鳥を此かしまはるを
鷹ことをれく鳥の落葉をとりて物
にあしくへんとてまちうに為く作の成へし

一 をきあはせといふ事
鳥のとらぬ草むらをとりて草むらより鷹
みさこ相鳩つくひて名残をしむ時の事也
一 とりかへしといふ事 わか鷹のとりたるをいふ
事わか鷹に鳥をとらせとりたる鷹をもたせて草
にあはせ名残をとらするなり
一 ねをとり川といふ事は草にかくれたる鷹にあはせて
其鳥を龍立といふ又ねとり川ともいふ
一 くひれをひといふ事 草の中なる鷹を走りてひ

くちに紙といふ也
一 鳥の羽まくら紙飼事 百日之飼也これはあらく
かうしの料也
一 なかやりといふ事は木のふしたる事也 木の上の
小枝に鷹のとまりたるをみる時に飼をも又
きつゝもやりあまりのありともし又より
のつくやまていふ也
一 そらひといふ事也
これは鳥の龍虫時鷹の紙をかけてみせん

する時よいで

一 とまけひらうこと八鳥乃くう目のうに鳥よりさけつてとる事

一 いくかとしとめらる事
見いおなおろやりしてゆ時鷹本居を
よりくてもとさ

一 二木鳥にのぼといふ事
これへつきぬ鳥の知くせらぬく本行
かくさあるへし御さ

一 山鳥をひらふ事 鷹の鳥をとらめる事也

一 風のおちる事 あわせたるうる時 おそくる
とよれり

一 犬をなくるる事 立文
大小の鷹も文かよふ人の知りたる所にて
二番の鳥とる時鷹犬をそへて心不知文字と
矢不知とて付るべからぬ鳥を人の口に出し見
又知不知にて立所なるべしてゆるさるる也
秘事なり

一 のきしらへといふ事
これは鷹を我がゐのつきはくとをいふ
一 乗るぬらいの事
是は鷹の逸し人の男女をたくみのらんと
する時鷹を飼ふ事あり大事秘文也
一 みそへてくるといふ事 又みそいともいふ
これは鷹を我が手にて次の時鳥をかへして鳥を放ち
と見つ言はく鷹をいひくともいへや
一 すゑのこそけるへしいつから合せよし

一 きよう根みせ根といふ事
鷹ふすを多れんとかもかりしは鷹を流
る時山にあつまりて鷹をあてても宜しき
あたしく流さる例あり
一 さわりといふ事
鷹の葉引んとみて目録事をしても鷹は
上へあかりて来てく鳥をあらちひとくいれと
さし鷹を流る時に根をさそふとし
一 拵小流しの事 大きくもしく数はて

一 さゝ鷹といふ事
梓にはしらつかれたる鳥此わか子文
始て鷹狩に出す時はこの鷹をさゝ鷹と云
一 ひとかへりといふ事
はしめの鳥狩をせさせて夏を入てふたゝひ出す
鳥をとらせてはなつてもとらは此つまきてありなんとの
の雉の毛の多き来る時は鮮鳥と云也又雉の
つまきてある雉の声をあるをとんよあかもると云也
一 鷹のとしいふと云事

鷹の鳥狩つくる業は枝のまて入はつゝいは
たかゝきりてもの木と云木の色毛青て
らしく少し身色ある是ハ本式也
一 大鷹といふハ女鷹也めかたかを鷹とは云
をんなの事也
一 春乃鷹狩
鷹のつかふと云事わり是ハ正月の末わ
ろくし兔はらてと申さかりの鷹の毛
乃ちかゝりにそくして面白き也

一 鷹のとやのかへりといふ事
閏月八月ある時ハ必入るゝ雄鷹を合せてとや
とらする手を翮に翮くれ出しに鷹の翮と云
一 鷹の合せ入へきハ鷹ハ七月十一日より
とやをとかする[illegible] 又五月中旬よりとやにいるる
一 頭ありとハ九月九日にとやを出すとも也
とりかへ月必入るゝ[illegible]べし
一 とやいりつけといふ事ハとやのりの事也
深院の内付をとやといふ也鷹の事ハ出羽国

羽のかたにありいそくのかへ手さしくる鷹の返
物也一說にハ丸とも云也
一 かへりあふきと云は定法に寳藏よりそらす[illegible]
七月より[illegible]しかけ[illegible]に付此證鷹
[illegible]入るゝ巣にありて子を[illegible]むとする時
て[illegible]けるを云此巣鷹とハかへり
あふきと云甲斐国の山中と云支那よりあて
[illegible]入るゝ今もけふをとハかへりあふきと
云返物也

一 信濃の諏方にて鳥をとらて云鳥を云是
を以て捕てとる所の鷹也これより鷹狩と
云事ハ諏方より始まり

一 神馬鷹と云事
信濃諏方の祭乃時奥州より神馬鷹を
ひきて鳥を小笠の鳥屋に流いくことの鷹ぬ
時に代に鷹を奥州より奉る事有これを
神馬鷹とも云是ハ諏方にて丸安之由しるく
神へまいる鷹をハ代とも流布にも丸鷹とも云之

一 鷹をとる急所を云網掛場にて鳥掛りとて
鷹をとらへる所より合せて掛るとる事を云之

一 鷹ハ小よ[illegible]と云是ハ鷹の胸のへん小有

一 鷹の涯り足緒といふ事
鷹に纏いあり又是をみちかきりん足緒[illegible]を
[illegible]錦さんらんとうさ[illegible]て作これをハ
つり足緒と云大小の鷹に何にもむすひし

一 鷹乃あはされとといふ事
大足緒を二尺足かけて又時大足緒を[illegible]

ありとも云大竺猪なるこのよう是ぞ鷹の時のよし
一 鷹の尾の数十二志れ是非ず不同
一 鈴付 力尾 腿尾とも云 鯛尾 付 力尾 ありけ巣ありけ巣の おとも云 足とり
石打 悪尾とも云事あり 是ハ悪の鷹とも云也
本説有 悪尾とて前になさま掛なるを悔又ニ有也
一 屋形とも云尾あり是も前のきれやしと
一 鷹ハ小衣とも云毛のあまた一としてあり 本ノマヽ
一 篠衣とも云是ハ鷹の乃羽てさし此中へ鳥と
篠て篠の中に落ぬ人はそれをさし衣と

出そろ第のしるあり
一 鷹のこい丸と云事
是ハ鷹みさごにゆずるかくうきれなる鷹之は
鷹をとりかう時先臭をとるをそれりを時
多丸井へ大や文くとるこさ池ハ神前梵の池
也さる時の沢多く真よあり
一 おそふとろこさて生るるとをもちて此鷹をとう
又おそとい何おそれ事也 此大にも大隅の浦
より頭おせり志れの悪の神草是を

かり神事殺穢の儀也

一 鈴

御幸成しこれ候殺読あり一条院の時

の事也 此鷹には口伝有也

鈴は右に七筆と云説あり 此左右は奥別甚に

あり七筆は居る文し 嬉座の鷹の説嬉

座をひくの此鷹同者也

一 鷹に爪四有

たけ爪うちつめとかくへの爪を是也

一 雪志ろあ鳥 諸あり白是皆白鷹也白鷹をは

をしわけりく 羽ひつりと云

一 鷹はこれく木にとまりつる跡を夜泊れと云も

古彼遠あしくの事也

一 たや婦さして云ふ羽といふなり

是は風にむかふとまりとぬ事候云又風を

うまてとも云 風あれのしるし也とって鷹に

行うへし

一 山さるりのくわり羽と云羽行也

是は山への有るやうにゑく能をのあり

拇なと云逆羽にあるへし
一 大忌にかゝる云詞あり
をんをたかもんと思ひ大切致也大切なり此
縁とも云なり
一 鷹に落羽も出し〳〵と云逆鷹を取ける
事なり
一 取逆と云事有法性具に似たる毛也鷹
の尾拇に何を云はなし
一 雲雀とも此鷹と云事あり尾も拇も雲に横

なる鷹羽になり
一 鬼ひしと云は鷹の目本にいかにも此有羽云逆羽なり
一 葛毛と云は腿に毛のならひ羽也
一 旧毛と云は鷹の（目の）此足のうらに有
一 こも法と云へと云は山の尾をとるる鷹と一つ
飛ぶとなり
一 荒あるとも鷹の此腹にありさりとも毛も同じ
一 梅花と云は鷹に有也
一 疲と云る鷹とはそろみしろとと云

一 鳥柴と云ハ鳥縄に付て柴のこと　内柴とて
鳥縄この柴は付く供御まゐらする之
春夏秋冬に付ていろ〳〵有り枝あり
縁付は志んしよ鳥縄付事あるへし
一 乃き羽とハ一筆ハつひ草さへたる時乃
事也
一 箸鷹と云ハ七月比毎日をとゝして鳥を
いふなりまたも文鷹よりて鷹有
一 まへ毛の羽の事

一 まかくしの羽同毛組合て有それに付て
つき鞍く毛色是る時まへ其の羽有色也
口伝可有之
一 赤鷹しにあしへたらむまほの大緒羽
まへの比鷹のかまへに
一 いろ〳〵に出る時生るを羽をあかして是と
ともふを称する鶴と云文字をかつ人ても
餌もらはも笠同事也
一 鷹鳥乃きうらふしうらへ山河をわたるとなる

うたかふと云也

一 鷹の左羽右羽と云事 左ハ能羽也

一 しろふとにみる事なり羽にある毛也 ひとつく
花てくれなき中羽をもつて見えぬやうにみらんての
毛ありとしるべし

一 何とて鷹ハ大鷹とも小鷹ともいふそと尋
けりなり

一 鷹に出来すと云毛ありて羽の中のあるを
やまい何利

一 鷹の紫革のひきまハし二筋と四寸八分也
政頼々の流也

一 はし鷹の鳥と云事あり 是ハ餅袋に
内にとまる鳥をとるの事也

一 鷹にわかれと云事有 白と鶉にこそ
まてとて振る一羽の尾羽の中に
小なるを後かきれをとるへく也
のも小羽にてこれと云のなる也

一 餌と云く振付小さき事其の内鷹にかある

一 色ハ紫の呈然と称し武家にハ不用

一 此守の鉾(カゴ)とハ光まりすゝみたる鷹の新
まり〱すゝみ紙目に付く乃の鷹とも云事
よき此鷹の毛ありと云事行り

一 鷹乃毛ハ村雲乃毛青身毛鵲此毛水鶏毛松
原の毛ハかくのことくりの鷹ハかり有りて是に山を
ちぎ身ん山鳥思ひもまへり此毛おやその毛世に有
毛うね世の毛これも鷹の毛もとさまる

一 二ツ目流きの毛ふくしくやく此毛(ひろきの)事也急ぎ此の毛

ともに又ちくら此毛ともにと云ふ鷹にもとも
の毛御しかうらん也

一 唐国より日本へ渡る人日本にて小柄(ホソテ)と云
此ハ鉄の先ともあて又りうのにくしめ御す
くりしく御みえくかれましく一石の云
河りし毛を人ハ称しへ大和流より日本乃
鷹狩の始とい此御鷹男也もと称さ
惜く悪毛ならしくや鷹ハこいくらに
事共に一説なり

一 鷹をみこみけしかけて鷹の田此中にをきて
華になにてきのこくうたれ拵よとをき
をきらつりと云一説也其葉ハ田木也

一 こゝれおさ乃前

一 鷹の薬此よりあひの事
まりつかの名柳に柳露のかたとそへ乃
くろ秋とる柳けさハ洛葉なり

一 拵ハ清ゆく事 大むの筆之
大鷹ハ七ひきとひとへ云せうハ六ひきとひくい
くろ五ひきとひ中鷹三ひきとひ云

一 記柳のとさ細とら事ハ入二寸也

應長二年三月中旬以秘本書寫之
手